

特集によせて

井 上 厚 史

2014年10月10日、蔚山大学校交流協定締結20周年事業シンポジウム「日韓関係を展望する—北東アジアにおける蔚山（ウルサン）と島根の絆—」が開催された。テーマは、二十年に及ぶ両大学間の交流を記念すべく、蔚山市と島根県の関係を見つめ直そうという趣旨である。

シンポジウムは、本田雄一学長の開会の挨拶に続き、蔚山大学校・李哲総長による「世界化（globalization）と大学の使命」と題する基調講演が行われた。グローバリゼーションの拡大に伴う競争の激化や、実用的技術や知識が強調される時代の中で、学生各自が自己省察の経験を通じて未来の成熟した指導者として成長できるような人間性教育を実施することが大学の使命ではないか、という問題提起がなされた。

次に、四本の学術発表が行われた。まず、蔚山大学校の魯成煥教授が「蔚山から島根に行った中国人陶工」と題して、萩焼の陶祖として知られている蔚山出身の女性陶工「李郎子」が、実は女性でも朝鮮人でもなく、浙江省杭州武林郡出身の中国人であったという新説の発表であった。次に、井上厚史が「李藝と石見のつながり—『朝鮮王朝実録』と『同文彙考』をもとに」と題して、近世における石見と蔚山との特別な関係は、実は蔚山出身の通信使だった李藝によって築かれたのではないかとの自説を発表した。三番目に、蔚山大学校の許英蘭教授が「忘れられた韓日出会いの場—蔚山達里村」と題して、一九三六年に蔚山邑達里村において日本人によって実施された農村経済および衛生状態調査について紹介し、蔚山が戦前から日本と強い結びつきを持っていたことの報告がなされた。最後に、本学の福原裕二准教授が「日韓関係における“隣接性の齟齬”を超えて」と題して、現在の日韓関係について、「時代状況に即応し、その中での共生と共栄の価値に立脚するような「相互理解と信頼」ある能動的な関係」を築くことの重要性を訴え、その意味でも両大学の交流がきわめて重要であると力説して、シンポジウムが締めくくられた。

本号の特集では、李哲総長の講演、および魯成煥、井上厚史、許英蘭の三名が発表原稿に修正を加えたものを収録している。福原裕二は、発表原稿に加筆したものを北東アジア学創成シリーズの一冊である『北東アジアと朝鮮半島研究』（国際書院、二〇一五）に収録し、本号においては省略することにした。

混迷を深める日韓関係であるが、島根県立大学と蔚山大学校との絆は政治情勢の変動の中にあっても揺るぎないものとなっている。そして、島根県西部と蔚山市の関係も、今回

のシンポジウムにおいて歴史的な太い絆があったことが三人の報告者による発表によって証明されたように思われる。国家間の対話が必要なことは言うまでもないが、地方大学間の学术交流が日韓関係に新しい展望を開くものであることを感じ取っていただければ幸いである。

(INOUE Atsushi)